

至福の野外博物館

福井 照

空前の不況だ。出口がない。公共工事の波及効果も2を切るまでに至っている。光ファイバーなどの情報インフラの先行投資で急場をしのいではどうかといわれている。また土地取引の活性化がやっぱり大事とも言われている。

いずれも過去をみている。もはや高度経済成長はわが国には存在しえない。環境に配慮された成熟の国それが日本の姿になる。それで良いと思う。

日本の国際社会のイメージは劣悪だ。まだ歴史が浅いからである。外国の人たちから尊敬されるには政治百年、経済百年、文化百年、計三百年の歴史が必要だ。人類は異文化に寛容である。支配する支配されるという意識を超える。永くイギリスに支配された国々の人々は、イギリス風のライフスタイルを身につけている。何百年も前には殺された先祖がいるに違いないのだ。

わが国は、まず経済の支配から始めた。しかも、いいとこどりの非定住指向だ。キリスト教の布教もぬきだ。使命感もない。もうけてそしてサーツと去ってゆく。これでは嫌われる。経済支配は、その国の土地を開発しその土地に根ざすことが基本だ。

そこで酒肴の一つに、わが国のまちづくりと国際協力共通の手段としての至福の野外博物館づくりを提案してみたい。

文明から文化、二十一世紀は文化の時代、二十一世紀はこころの時代というトレンドのなかで、各都市で文化行政が展開されているが、箱ものをつくることだけがまちづくりと建設業の接点ではない。

まちづくりのコンセプトとして、まち全体を野外博物館 (field museum) として整備するということにはどうだろうか。橋や道路を美しくつくるということは当然のこととして、後継者不足問題として共通の農村の荒廃および中心市街地商店街の衰退の解決、中山間農村の田園風景の維持保全、水質の改善、ごみ、し尿、産廃の学習、ビオトープ等天然環境の復元、森林の保全、雑木林の復元等々である。いずれにしても人間の皮膚の表面にある暖かい空気の皮膜のようなものが文化だというコンセプトでものを考えたらどうだろうか。そして、生涯学習しているボランティアの市民全員がその博物館で館員であり外来者への説明員であるという姿は理想郷だろうか。

このノウハウで発展途上国の技術援助も行いたい。貿易外収支をかせぐためエコミュージアム (eco museum) としての整備を図っている国もあると聞く。超天然や遺跡を守りながら人間もアクセスできるバランスを保ち、地球との共生を実感できる観光ができれば最高ではないか。

至福とはふとした昼寝である。時さえも忘れる境地。こだわらからすいと抜け出られた人生のある瞬間。こんな感じを抱かせるまぢまぢに人々は集う。交流する。そんなまぢまぢくりに参加できる人々の喜びも深い。土木とは志を空間におとしこむ崇高な作業である。歴史的転換期における土木の役割は重い。